YAMAGA

近代の山鹿を
築いた人たち
シリーズ
004

海軍造船の至宝（一八七四～一九五九）

野中季雄（のなかすえお）

工学博士。元海軍造船中将。激動の明治・大正・昭和初期に掛けて戦艦「扶桑」「長門」、巡戦「赤城」や潜水艦など多数の艦船の設計、建造に当たる。海の時代と言われ、欧米の先進国に肩を並べようとしていた時期に、日本の造船技術を世界のトップクラスにまで高め、日本造船のあけぼのの時代を切り開いた人物で「海軍造船の至宝」と言われた。退役後は、九州帝国大学教授となり昭和十年、現九州大学の名誉教授となる。

野中 季雄

NONAKA SUEO 1874～1959

東京帝国大学で造船を学ぶ

野中季雄は、熊本県の北部、鹿本郡岩野村（現山鹿市鹿北町岩野）で明治七年（一八七四）に、野中格弥の四男として生まれました。

季雄の生まれた岩野村は、山鹿市鹿北町岩野となった今日でも、緑豊かな山と入り組んだ田畑が見られる典型的な山間の農村です。一番近い海である有明海に出るまで直線距離で二十六キロメートルほどあります。鹿北には菊池川（一級河川）の支流である岩野川が流れていて、休日には魚釣りに訪れる人もいます。この岩野川は鹿北の人々にとっては、生活と密着した川でした。

七人兄弟の末子であったため、季雄と名づけられました。生まれた家は地元では裕福な家とみなされていて、明治十二年（一八七九）に村議会が設けられると、父格弥は副議長に推されていました。

季雄は明治二十二年（一八八九）三月に地元の山鹿町高等小学校を卒業しました。当時から算数が得意だったそうです。

同年十二月に第五高等中学校予科に進み、明治二十九年（一八九六）六月に、第五高等学校（現在の熊本大学）大学予科を卒業しました。季雄は、その年九月に東京帝国大学（現在の東京大学）工科大学造船学科に入学しました。

造船業の発達と海軍への道

季雄が海軍に入ることになった背景には、明治期の熊本の知識人層の「海を活用した国家発展」の発想があったためではないかと考えられています。日本が工業立国を目指すには海外から原材料を輸入する海運業の発展が必要であり、また水産業で国を成り立たせるにしても、造船業の発達が必要と考えていました。

また、海軍に入ることは、家族構成の上からして、長子でない季雄にとって、家に負担をかけず（この頃、家業が傾きかけていた）に学業を続ける方法でもありました。

季雄は翌年明治三十年（一八九七）の十二月に、二十三歳で数少ない海軍造船学生に選ばれています。明治国家の人材育成政策の中で、おそらく若き季雄は「たとえ田舎の四男坊であっても、学業優秀ならば国家が生計の面倒をみてくれる」という事実に希望を強くし、そして海軍は彼の希望を充分に満たしてくれるものだったと思われます。

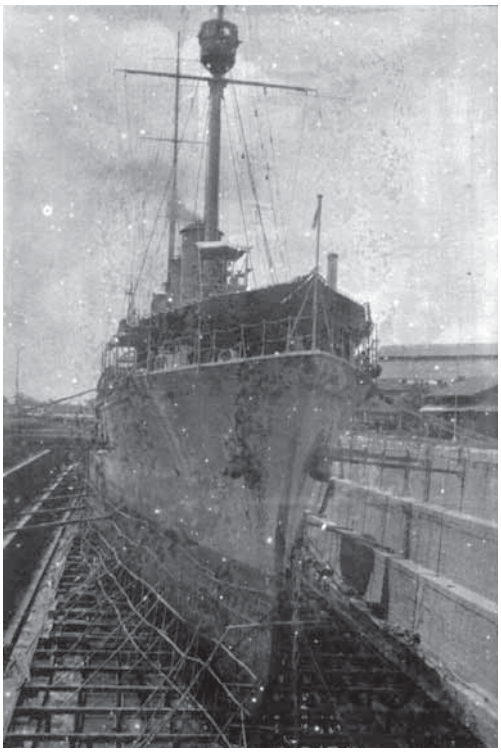
当時の社会にあって軍という存在は、長男でない者や経済力に恵まれない階層にとって、社会階層を上昇するわずかな窓口でもありました。おそらく季雄は大きな希望を海軍の将来に見、自らの未来を重ねたことでしょう。

造船技術で世界一の国をめざして！

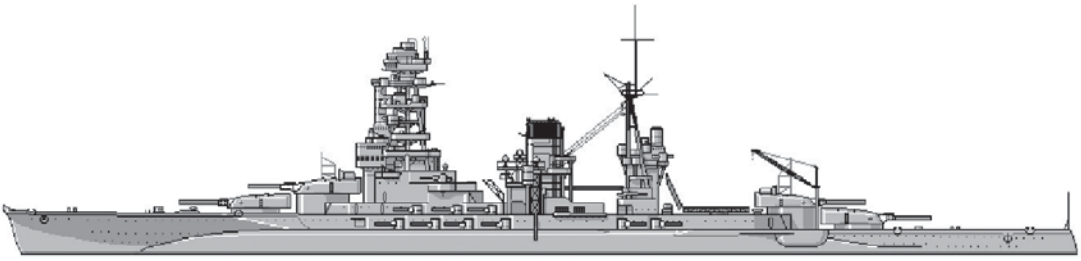
明治から昭和にかけての時代は、日本が欧米の先進国に肩をならべようと努力した時期でした。特に産業の分野で、工業面で立ちおくれを克服し、世界に負けない工業国家を実現していくことは国家的な課題でした。また、当時の国際社会は、先進国が強大な軍事力を背景に他国に対する優位を保ち、国力をさらに増大させている時代でした。日本も他国に負けないよう、軍備を強化させることが「強い国」になるために大きな課題でした。

季雄は、このような背景の中、まだ未発達だった日本の造船の技術水準を高め、世界トップクラスの造船大国へと成長させ、戦艦大和など世界に誇る巨大戦艦を有する世界最強の海軍を実現する基礎を固めた技官として、戦後も高い評価を受けています。

太平洋戦争の頃に勇姿を誇った「大和」はみなさんもよく知っていることでしょう。当時の日本の海軍は「大和」を中心とした多くの強力な軍艦を持ち、その海軍力によって、太平洋戦線では、超大国アメリカ合衆国を相手に戦いを繰り広げていたほどでした。



ドックで建造中の戦艦「金剛」



戦艦「長門」　全長 約225m　はば 約35m

しかし、日本が軍艦を自国で建造できるようになったのは、明治時代も終わりを告げようとしている頃でした。そして、その日本の造船のあけぼのの時代を切り開いたのが、当時まだ三十代の若き季雄だったのです。

季雄は、二十二才の時に第五高等学校（現在の熊本大学）を卒業後、東京帝国大学（現在の東京大学）造船学科に入学し、二十五才で同大学卒業後すぐに、海軍の造船官となりました。造船官とは、軍艦の設計、建造から運用・修理までを担う技士です。

横須賀海軍工廠で中心となって国産軍艦の建造に貢献しました。そこでの活躍が認められると、造船の最先進国イギリスへ留学し、最先端の造船技術や理論を学んだり実習したのです。このときまだ二十八才という若さでした。この時の経験を生かして、呉海軍工廠で、海軍造船中将（軍人では大将にあたる最高の位）にまで出世した季雄は、四十九才で現役を退くまで、海軍の軍艦建造を指揮し「無敵の連合艦隊」を築くことに大きく貢献したのです。

季雄が設計したり、建造に従事した軍艦は、戦艦「金剛」「長門」をはじめ、巡洋艦「筑摩」「最上」、後の空母「赤城」など、まさに全盛期の海軍連合艦隊の主力となる艦船ばかりでした。

野中 季雄

NONAKA SUEO 1874～1959

戦後の日本の造船業の発達を夢見て

「必要なのは人材・・・」

大正十二年（一九二三）に海軍を退官後、季雄は九州造船会の初代会長に選ばれるとともに、九州帝国大学（現九州大学）の教授にも任ぜられ、産業界の発展と同時に、造船技術者の育成にも力をそそぎました。

「造船教室の卒業生を九十一人送り出し・・・」と回想されていたそうです。

卒業生の多くは、造船会社に就職し、以後の海軍の発展の大きな力となりました。そして、敗戦後は、平和で民主的な日本の復興と成長を、経済面から支えたのが造船業界でした。言うまでもなくその担い手は、季雄が育てた技術者たちだったのです。

ちょっとコラム

●野中氏は、造船の現場で、労働者を監督したり指示する時に、自分自身が職工の実習をしたときの経験が役立ったと回想しています。

実習中、慣れない作業で手を傷だらけにしているとき、外国人の指導者から、「あなた方は幸せです。今、こんな経験をしていると、将来人を使う時に、仕事に親しみが持て、よく注意が行きとどき、人に仕事をさせるこつが自然と分かります。」とさとされたそうです。

野中氏はこの言葉に感心し、「外国の職場長たちは、職工が休めば、自分が替わって職工以上に働ける人たちばかりだった。」「私も（船を組み立てる）仕事はどんな風にやるべきかがくわしく分かって初めて、自信を持って人に仕事を命じられるようになった。やらせる仕事に自信が出た。」と後輩たちに語っています。

日本工業の将来は船にある

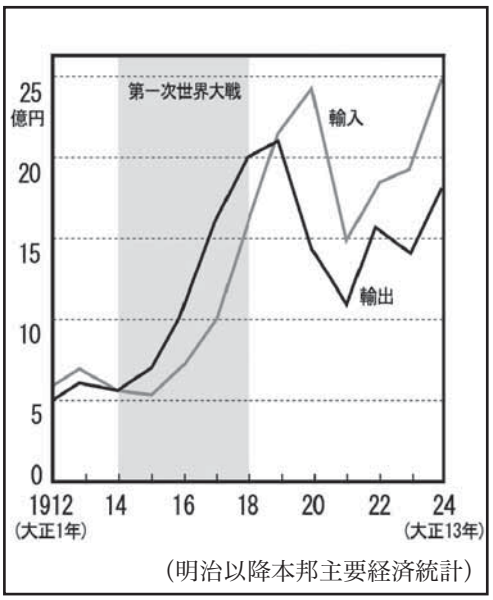
第一次世界大戦時（一九一四年～一九一八年）、日本の貿易は輸出が多く景気がよい時代でした。しかし、その後日本の貿易は、輸出より原料品や食品の輸入が多くなり、貿易は振るわなくなりました。昭和に入り、日本の経済は輸出不振により不況におちいり銀行や多くの企業が倒産しました。また、人口も増加の傾向にあり、輸入がさらに多くなっていくことは避けられませんでした。これにより日本の海外への支払いは増えていく一方でした。

資源の乏しい日本において経済を回復するにはエネルギーの供給と経済活動の中心ともいうべき造船であり海運業に力を入れることでした。

昭和四年（一九二九）七月六日に九州帝国大学工学部造船科学生が実習を始める前の出発コンパで季雄は　次のようなあいさつをしました。

「日本の貿易の支払いを減らすには日本を工業国にしなければならない。原料は輸入するが製品をたくさん輸出し、その運賃は安くしなければならない。つまり日本の海運業を盛んにしなければ

貿易額の変動



（明治以降本邦主要経済統計）

ならない。それには船の優秀さはもちろん多くの数が条件になる。すなわち日本の造船業の発達が必然である。日本を裕福にさせるにはこれしかないのである。

また、日本は世界第一位の水産国である。海外に比べると漁業に携わる人々は圧倒的に多く漁船も比べものにならないくらい多い。人数と船の数に対して漁獲量は少ない。これは日本の船が小さいからである。もし船を大きくすれば人は増やさずに漁獲高をもっと上げることができる。

つまり日本を金持ちの国にするためには造船業を盛んにしなければならない。

また、日本の船舶の量は世界第三位であるが老朽船が非常に多い。だから今後新しい船をつくための改良を学生に期待したい。」

このように、季雄は日本の将来は造船にかかっていると考えていました。

昭和初期の日本の漁船

このあいさつの三ヶ月後のことでした。経済がふるわない状態の日本に追い打ちをかけるできごとが起こりました。一九二九年十月にアメリカで起こった恐慌でした。このできごとはすぐに世界に広がり、世界恐慌と呼ばれました。日本もすぐその影響を受けました。資源の乏しい日本にとってはもはや海外に目を向けるしかなく、軍を中国に進めることとなっていきました。

季雄の言う造船業の発達は、戦争にも生かされることになるのでした。

わずかな私財で「野中賞」
～たくされた思い～

敗戦とともに海軍建設に貢献した季雄の業績は忘れ去られました。戦後、故郷の岩野村にもどり、つつましい生活を過ごしながら、季雄は故郷の子どもたちのために「野中賞」を設けました。人材育成にかける季雄の思いは死ぬまで変わらなかったことの証ではないでしょうか。

季雄は、亡くなるまで自分の業績を誇ることもなくひっそりと余生を過ごしたそうですが、季雄の業績の大きさは、決

季雄が建造にたずさわった戦艦「長門」。巨大戦艦の建造を可能にした造船の技術力が、戦後は世界一の巨大タンカーの建造などを通して、海運を支え貿易を盛んにし、高度な経済成長を成しとげる基礎となった。

野中 季雄

NONAKA SUEO 1874～1959

して忘れ去られたわけではありません。現在も九州大学海洋システム工学部では、四年間の成績が最も優秀だった学生一人を、「野中賞」として表彰する制度が継続されているそうです。

季雄の志は今も受け継がれているのです。

数々の勲章をもらう

季雄は、六十歳の時に九州帝国大学の教授をやめました。昭和九年（一九三四）その同じ年に、季雄はその業績を認められて、天皇陛下より勲一等瑞宝章をもらっています。彼がもらった数々の勲章は、現在出身校である岩野小学校の校長室に飾られています。

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ム
日本國皇帝ハ正三位勲二等野中季雄
ヲ明治勲章ノ勲一等ニ敍シ瑞寶章ヲ
授與ス即チ此位ニ屬スル禮遇及ト特權
ヲ有セシム
神武天皇即位紀元二千五百九十四年
昭和九年六月二十一日東京帝宮ニ於テ
親ラ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム
祕仁
昭和九年六月二十一日
賞勲局總裁從二位勲一等子爵 平塚廣義
此證ヲ勲簿ノ第七九万二千四百三十五
號ヲ以テ勲等簿冊ニ記入ス
賞勲局書記官正五位勲四等 伊手 衛

勲一等賞状

昭和二十年（一九四五）、日本の敗戦によって、季雄の業績は夢のように消えてしまいました。当時、彼は福岡市に住んでいたのですが、連合国軍（日本と戦争をした相手）によって、住まいを取り上げられてしまいました。それは、戦争のための戦艦を設計する仕事をしていたからです。

勲一等勲章

故郷の子どもたちのために

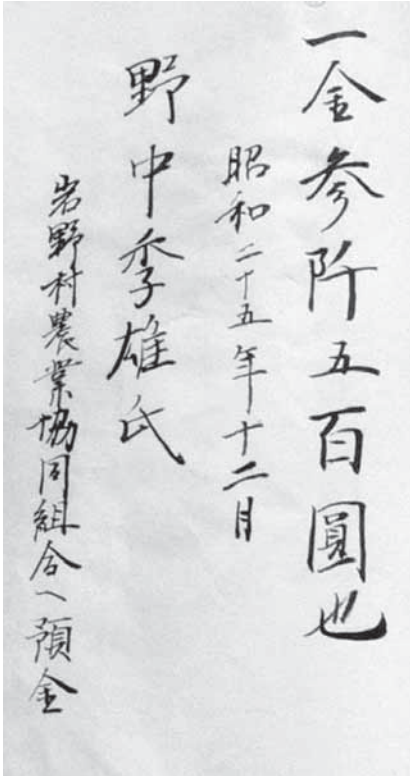
その後、季雄は岩野に戻り、親せきの家に身をよせたりして暮らしたそうです。故郷に戻った季雄は、故郷の子どもたちの教育に力を注ぎました。

自分の財産を使って、「野中賞」として、勉強をがんばる子ど

もたちを賞する活動を続けました。

賞品といっても、敗戦後の混乱した時代です。ペンとか鉛筆といったものだったと言われています。

この賞は、彼の死後も妻によって、引き継がれていたそうです。



戦後数年間の寄付をもとに
「野中賞」が設けられる

昭和54年奥様を迎えて

晩年を妻と共に静かに過ごす

季雄には四人の子どもがいました。しかし、長女は五歳で、次男は二歳で死去し、次女もわずか一歳で死去したそうです。最後に残った長男の重弥も四十一歳で病気で亡くなりました。長男の重弥には子どもがいなかったため、季雄の晩年は妻と共に静かな生活であったと言われています。妻と共に菜園を耕し、季節の野菜を栽培していました。近所の知人の訪問を喜び、いろいろな話をするのが楽しみだったそうです。

そんな季雄も昭和三十四年（一九五九）数え年八十六歳で死去しました。彼の石灯籠（とうろう）は現在も岩野の中津川にあります。

墓石（右）と天皇陛下のご下賜金（かしきん）で建てられた石の灯籠（左）

海軍造船の至宝

野中 季雄

NONAKA SUEO 1874～1959

年表 History

一八七四年（明治七年）	▼熊本県鹿本郡岩野村（現山鹿市鹿北町岩野）にて、野中格弥の四男として出生。
一八九六年（明治二九年）	▼第五高等学校大学予科を卒業し、東京帝国大学工科大学造船学科に入学
一八九七年（明治三〇年）	▼海軍造船学生を命ぜらる。
一八九九年（明治三二年）	▼東京帝国大学を卒業し、横須賀海軍造船廠造船科主幹となる。
一九〇二年（明治三五年）	▼イギリス駐在。グリニッジ海軍大学造船学科を卒業
一九〇五年（明治三八年）	▼イギリスから帰国し、艦政本部に出仕。
一九〇七年（明治四〇年）	▼海軍艦政本部部員に補せられ、海軍造船少監となる。
一九〇八年（明治四一年）	▼艦政本部部員を免ぜられ、第一艦隊附となる。
一九〇九年（明治四二年）	▼横須賀海軍工廠造船部員に補せられる。艦政本部勤務中に、戦艦「安芸」「薩摩」「河内」「摂津」、そして巡洋戦艦「伊吹」「鞍馬」、また軽巡洋艦「平戸」「矢矧」「淀」「筑摩」「最上」の他、駆逐艦「海風」「山風」など諸艦の計画に従事する。
一九一〇年（明治四三年）	▼造船監督官に補せられてイギリスに出張。イギリス出張中は、主として巡洋戦艦「金剛」の建造監督に従事。海軍造船中監に任ぜらる。
一九一三年（大正二年）	▼帰国後、艦政本部に出仕し海軍大学校教官も兼務。当艦政本部勤務中に、巡戦「榛名」「霧島」の儀装ならびに駆逐艦の計画に従事。
一九一四年（大正三年）	▼海軍造船大監に進み、呉海軍工廠造船部長（第三代）に補せらる。
一九一九年（大正八年）	▼欧米各国へ出張。第一次大戦中のドイツ海軍における潜水艦の計画や建造について調査や、イギリス、フランス、イタリア、アメリカ諸国の官製、私立の造船所を視察。帰国後、工学博士の学位を授けられる。海軍造船少将。戦艦「扶桑」「長門」、巡戦「赤城」（後空母に改装）駆逐艦三隻、潜水艦十三隻、特務艦三隻の建造に従事。
一九二三年（大正一二年）	▼艦政本部に出仕。海軍造船中将となり、予備役を仰せ付けられる。満四十九歳。
一九二四年（大正一三年）	▼九州帝国大学教授に任ぜられる。「九州造船会（現西部造船会）」の初代会長に選任される。
一九三四年（昭和九年）	▼依願をもって九州帝国大学教授を免ぜられた。六〇歳であった。勲一等瑞宝章受章。
一九三五年（昭和一〇年）	▼九州帝国大学名誉教授の名称を授けられる。
一九五九年（昭和三四年）	▼十月、熊本県玉名郡高瀬町岩崎の安成病院（甥の安成朝光氏が営んでいた）において死去。数え年八十六歳。

あとがき

山鹿市教育長　田中　宏

山鹿市では「人づくり」を大きな理念・目標として行政に取り組んでいます。

そのような中、教育委員会では「近代の山鹿を築いた人たち」と題して、ふるさと山鹿の今日を築いた偉人を、子どもからお年寄りまで広く市民の方々に紹介し、顕彰できる冊子を発行しようと考えました。特に未来を担う子どもたちに、ふるさと山鹿にはこんなに立派な先輩がいたと言うことを知ってもらい、郷土を誇りに思い、将来に夢と希望を持ってもらいたい。このような願いを込めて発行したものです。なお、編集に当たっては、各学校の先生方に献身的にご協力をいただき心から感謝致します。

参考文献
『野中季雄先生の経歴』友田　政就著
『海軍造船官“野中季雄”とその建艦技術への貢献』本山　聡毅著
写真資料　岩野小学校・インターネット

近代の山鹿を築いた人たち　004
海軍造船の至宝　野中 季雄

平成 20 年 3 月 発行

山鹿市教育委員会　教育部　文化課
〒861-0541　熊本県山鹿市鍋田 2085（博物館内）
TEL　0968 - 43 - 1691

編集委員
委員長／中山　哲朗（鹿本中）　班　長／星子　和寿（岩野小）
委　員／塚原　　聡（岳間小）　原口　義史（鹿南中）
　　迎田　　稔（広見小）　田川　充治（山鹿小）